

「希楽 與家 の 恢輝譚(かいきたん)」 IFルート

魔性/ALL

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こちらは

「希楽 與家」の 恢輝譚（かいきたん）のifルート
となっております。本編を参照しないとよく分からないので、ま
ずは本編の方を参照頂けたらと思います。

????? ?????????????

①

①

|

|

目次

5

1

????????

①

自分は今ルーミアと一緒に博麗神社まで向かう準備を進めていた。ルーミアは驚いていたが、行動は早くした方がいいと思い、ルーミアと直ぐに出かけた。

その道中は妖怪が出るというので、自分はルーミアから離れないことを決意し、自己防衛として料理用の肉包丁を持つていくことにした。妖怪に効くかどうかなどはわからないが、無いよりは増しだと思じて。

ルーミアによると、最近霊夢は人と話すことを避けているという情報を誰かから聞いたという。その誰かというのは今は思いだせないらしい。思い出せないのは仕方ないこと、とりあえず自分の今の状態から救ってもらえるのならどうでもいい。

自分達はそのまま先に進む。

ルーミアは嫌な予感がすると言っていたが、自分にはそうは感じない。それに、博麗神社が危ないとなると、これ以上安心する場所なんてない気もする。

人里は通れないので、自分達は回り込むことを決めた。何体かの妖怪が襲い掛かってきたが、ルーミアはそれを全部退治してくれた。ルーミアには申し訳ないが、今の自分に出来ることはない。頼るしかないだろう。

そして、2時間後。

本当になら、20分もかからず到着するというのだが、自分は空が飛べない。だから直通なんていうことは出来ることではないのだ。

辿り着いたのは2時間と少し。かなり、時間がかかるようだ。いや、田舎という田舎の中では早い方なのかもしれないが。

そして

階段を登る

何だろう

あれは

これは、階段から流れているものは。

血、？

自分は即座に足を止めた。周りを見渡し、ルーミアに助けを求めようとする。だが、ルーミアは何故か近くに存在しなかった。血が滝のように階段から流れている。上、から、流れている。

妖怪でも退治していたのか？

いや、退治してきた妖怪に血なんて出なかった。

じゃあ、この血は一体??

足元に生暖かいものが下に向けて流れていく。終わりそうにない。

ドサツ

音が階段の上から聞こえている。自分は恐る恐る上を見上げると。

そこには首があらぬ方向に向いている男性の姿が上から落ちてきた。

逃げよう。

逃げるんだ。

本能がそう叫ぶ。

ルーミアは一体どうしたのだろうかという気持ちは勿論あったが、それ以上に襲い掛かってくる恐怖を前に逃げ出すこと以外出来るわけがなかった。

そして後ろを振り向き、逃げようとした。

その時だった。

「あらー、私のお仕事を見たのですね。では、すいませんが排除させていただきます」

そんな声が聞こえた途端。自分の身体が宙を舞った。

最後に映ったのは自分の身体と、真っ赤になりすぎてよく分からぬ存在がそこにはいた…

BADEND①… 鮮血を纏った隙間ノ子

????????????????

①

「はあはあ…」

ルーミアも心配だった、けどそれでも自分だけでも前に進むことをしなければならぬ。それよりも、紅魔館に近づくことはなぜかルーミアはしなかったのは謎だが、嫌がつてるといふよりも行く気力がなかつたようだった。

仕方ない。

「紅魔館かあ…： 一人で行つて大丈夫な場所だつたっけ？」

記憶が曖昧だ。思い出せることができない、それよりも先に思考がいつてしまう。考えることが今の自分にはできていない。

「まあ、いいか」

悩むのは答えが見つからないことで、考えるというのは答えがあつて、それに決断をするかどうかという違いがあると思つてゐる。だからこそ、今の自分には考へてゐるのではなく、悩んでゐるのだろう。

まあ、これは知り合ひの受け売りなのだが。

「ルーミアとは一緒に行く予定だつたけど、とりあえず安全確認だけしておくとしてよう、」

そうだ。

本当なら一緒に行く予定だつたんだ。だけど、自分だけの気持ちを最優先して先に行つてしまつたんだ。

後で謝らないといけない。

「とりあえず、なんとなく道わかつたし帰るとしようかな…」

そう、自分は進んできた道を帰ろうとする。ただ、それだけの筈だった。

ガリッ！

ゴリッ！

明らかに何かを削る音。それは湖があつた方向から聞こえてきた。不快感を感じさせる硬いものを無理やり削つた音。まるで、そう

骨をかじる様な。

普通ならこんな音は聞いたことが少ないのが普通。だけど熊などの肉食動物が人間を襲う音はこんな感じの音だと自分は知っている。いつ聴いたのかなんてことはわからない。けど、確実にこの音は

死をもたらす。

逃げなきやならない。このままでは死ぬ。

「う、うわあああああ!!!」

そして、自分は自分で死に向かって行ってしまった。

自分は知っていた筈だったんだ。音を立てれば相手に気づかれる。恐怖心を抑え込み、その場から動くことをやめるか、歩けば良かったのだと。そうすれば、相手に見つかり自分を危険に晒すことはなかったのだろう。

気付いた時には大抵のことはもう遅い。このこともそれに当てはまってしまった。

「あがつー、」

一心不乱に走り出し、前を見ていなかった。道に落ちていた石に足をとめられ、止まってしまう。

そして、

「あ、あ、」

そこには何かを背中から光らせている人物が見えた。だけど、その顔は見えない場所にいるのか、見えていない。ただただ、そこに誰かいるとしか分からない。

でも間違いなく、あの音を鳴らしていたのはこいつだ。本能は逃げろと頭の中でずっと叫ぶ。

「あーあ… ツマンナイツマンナイ」

何故か、甲高い声でこいつは言った。そして、にやけ顔だけを見せ、自分は内側から何かが発射するような感触を味わったのが最後に意識を失った。

BADEND… 後ろの正面だアレ？